

超音波のリアルタイム性を診断に活かす

◎大久保 友紀¹⁾、林 尚美¹⁾

塩屋 晋吾²⁾、重田 浩一朗³⁾

霧島市立医師会医療センター 臨床検査室¹⁾

霧島市立医師会医療センター 放射線室²⁾

霧島市立医師会医療センター 消化器内科³⁾

【はじめに】

「所見の読み違い」これは超音波検査を施行する上で、誰しものが必ず経験する。精神的にもダメージをうけ、もうエコーなんかしたくない！と思うことも多々ある。しかし考え次第で、これは新たな武器を手に入れるチャンスとなりうる。今回は腹部エコーでの所見の読み違いから、リアルタイム性(動き)をよく観察するという武器を手に入れ、様々な症例で応用できた case を紹介する。

【case 1 ; 体位変換を診断に活かす】

臍分岐型 I P M N 内に高エコー像を認め、エコーで「I P M N 内結節疑い」と判断した症例。EUS 下ソナゾイド造影では「造影認めず、粘液」の診断であった。⇒以後、「結節 or 粘液」を体位変換による移動性を確認し、判定に活かすことにした。他にも、胆嚢の結石 or ポリープ、胆嚢癌 or 胆泥の判定などにも有用であった症例を提示する。

【case 2 ; スライディングを診断に活かす】

腫瘍の由来臓器の判定や悪性腫瘍の多臓器への浸潤の評価に有用であった症例を提示する。

【case 3 ; 腫瘍内動的性状評価を診断に活かす】

肝臓占拠性病変の質的診断に難渋する症例において、内部の動的性状を観察することで質的診断に寄与した症例を提示する。

【まとめ】

所見の読み違いを経験した事から、リアルタイム性(動き)を意識した検査を行う様になった。CT・MRI ではできないリアルタイム性を意識した検査で、診断・評価に非常に貢献できた症例を提示する。